

【第二章】

II

発災から復旧期まで。
浪江町が歩んだ激動の10年



2011.3.11

2011 (平成23) 年 3月11日

3月11日 初動期の対応

ふるさと浪江を襲った未曾有の複合災害

■ 巨大地震、大津波、原発事故発生

震災当日、町内は中学校の卒業式があり、町議会は、定例会の会期中で、午後から全員協議会を開催していました。役場本庁舎が激しく揺れ、役場庁舎にいた人たちは自分の体を支えるのがやっとの状態。長く続いた揺れが収まると、各自、自然災害対応へと向かうとともに、町では災害対策本部を設置しました。

地震発生から3分後の14時49分には、気象庁より福島県沿岸に大津波警報が発表。

14時50分、町の防災行政無線で「只今、大津波警報発令中です。直ちに沿岸地区の棚塩地区、請戸地区、中浜地区、両竹地区の方は指定された避難所に避難してください」と避難を促しました。続く14時54分には、福島県沖深さ36km、震度5弱の余震が発生、町内各所に避難所の設営を指示しました。

15時33分、大津波の第一波が町沿岸部に到達。沿岸部の住民の多くは、津波避難場所である大平山、

棚塩霊園をはじめ、幾世橋小学校、役場本庁舎、サンシャイン浪江などに避難しました。同時刻、消防団に出動を要請し、避難広報および避難誘導活動を行ったものの、数回にわたって大津波が町を襲うという未曾有の被害をもたらしました。福島県内を見ると、この津波により沿岸市町村面積の約5%にあたる111km²が浸水、都市機能が著しい影響を受けました。

この大津波の影響により、福島第一原子力発電所1・2・4号機が全電源喪失、3・5号機が全交流電源喪失という事態に陥りました(15時37分～41分)。東京電力から国に通報が行きましたが、町への連絡はありませんでした。役場本庁舎では、請戸地区などの津波被害対応と被害に関する情報収集、救助活動、避難者の受け入れ等に当たっており、東京電力福島第一原子力発電所で緊急事態が発生している事実は認識されていませんでした。

2011（平成23）年

【3月11日】

14：46 浪江町震度6強の地震



// 浪江町災害対策本部設置

14：50 防災行政無線により
大津波警報発令放送

// 沿岸住民に避難勧告



// 各所に避難所設営



14：54 浪江町震度5弱の地震

▼ 町職員および消防署員より
倒壊家屋および道路陥没など
状況報告

15：33 津波第一波到達

15：50 社会福祉協議会（日赤）へ
炊き出し要請

東日本大震災直後に開設された避難所

- | | |
|----------------|---------------------|
| 1. 浪江町役場 | 10. 浪江町老人憩いの家 やすらぎ荘 |
| 2. サンシャイン浪江 | 11. 浪江町中央公民館 苅野分館 |
| 3. ふれあいセンターなみえ | 12. 浪江町中央公民館 大堀分館 |
| 4. コスモス保育園 | 13. 北棚塩総合集会所 |
| 5. 福島いこいの村なみえ | 14. 室原公民館 |
| 6. 浪江町立浪江小学校 | 15. 上立野公民館 |
| 7. 浪江町立幾世橋小学校 | 16. 立野中 多目的集会所 |
| 8. 浪江町立苅野小学校 | 17. 介護老人保健施設 貴布祢 |
| 9. 浪江町立浪江中学校 | 18. 諏訪神社（両竹） |

TOPICS

津波到達40分前。請戸小学校の避難

海岸から約300mの場所に位置する請戸小学校。3月11日、学校には1年生を除いた82人の児童と教職員13人がいました。

14時46分、東日本大震災発生。机の下に入った児童たちは、揺れが弱まると上履きのまま校庭へと避難。津波が予想されるため、教職員らは児童を保護者に引き渡さず、学校北側の農道1.6km先の大平山に一斉避難することに。車椅子の児童は担任が背負いました。

その40分後、請戸小を襲った津波は、鉄筋コンクリート2階建ての校舎の1階部分天井まで達し、学校をことごとく破壊し尽くしました。

大平山から国道6号へ到達し、偶然通りかかった大型トラックが、児童や教職員、住民など約100人を荷台に乗せて役場本庁舎へと避難。請戸小では誰一人犠牲者が出ませんでした。



2011.3.11

2011 (平成23) 年 3月11日

発災直後の町の状況

1,000人以上の町民が安否不明に

■押し寄せる住民。混乱を極めた避難

役場本庁舎内の町災害対策本部においては、ライフラインやインフラなどの被害状況の確認を急ぎました。同時に、消防、警察、自衛隊などからなる合同対策本部を立ち上げ、対策協議を開始。各部署の職員は関係機関等に状況確認の連絡を入れましたが、電話が全くつながらないという状況が続きました。このとき、安否が分からない町民は1,000人以上におよび、搜索活動を開始しました。また、町内に開設された避難所に職員を派遣し、殺到する住民の対応に当たりました。大津波が自宅や学校を飲み込む様子を目の当たりにし、泥だらけになりながら体育館や役場本庁舎などに避難した人も多く、避難所は混乱を極めました。

以下、当時の町民の避難の様子を「浪江のこころ通信」より抜粋します。

- ・地震直後は津波を警戒してお墓のある高台へ逃れ、その夜は近くの北棚塩集会所で夜を明かしました。
- ・地震が起こったときは、自宅に戻っていないため、父母から話を聞いても実感がわきませんでした。
- ・震災当日は自宅にいましたが、請戸の実家が心配で見に行った途端、逆流する川を見て大変なことが起きていると思いました。

- ・津波に流されてレスキュー隊に助けられ難を逃れました。寒い暗闇の中で助けを求めている人が大勢いたはずです。
- ・地震直後、消防車で避難誘導をしました。大津波が迫り、いよいよ危ないというときに、消防車を乗り捨てて高台に避難しました。
- ・大地震発生のとき、樋渡の自宅にいました。パソコンで作業をしていたところ、気がつくや落ちてきた柱時計を抱いて横になっていました。
- ・強い揺れの後、職場（富岡駅前）から水平線を眺めていると、10mを超すと思われる真っ黒い波の壁が見えました。とっさに大津波の危険を確信し、近くの人に避難を呼びかけました。通称「山麓線」を辿って自宅へ戻ろうとしましたが、橋のたもとには大きな亀裂や隆起ができていて、周りの人たちと丸太を組み、助け合いながら家に戻りました。
- ・高台に家があったこともあり、津波は大丈夫でしたが、家の壁は崩れて、隣の部屋が見え、食器が棚から飛び出し、全部割れて泥棒が入ったような状態。揺れていない時間の方が短いくらい余震もひどく「今日が私の命日か」と思ったほど怖かった。

地震・津波被害が拡大していく中、11日19時3分、国により福島第一原子力発電所の「原子力緊急事態宣言」が発令。続く、20時50分には福島県災害対策本部

TOPICS

地域住民50人の命を助けた諏訪神社

浪江町と双葉町の両町にまたがる両竹地区にある諏訪神社。この神社は、海岸から約1km、標高30mほどの高台にあります。震災当時、高さ約15mもの津波から身を守るために、約50人の周辺住民が境内に避難しました。震度6強の揺れで本殿は倒壊。避難した住民は壊れた社殿の材木で火を起こし、ずぶ濡れになった体を温めて寒さをしのぎました。住民は不安な一夜を過ごし、翌日に自衛隊のヘリで無事救出されました。

諏訪神社はその後、2019年11月5日に再建を果たしました。現在、この地域には、国、福島県、双葉町および浪江町が連携し、復興祈念公園の整備を計画しています。



より福島第一原子力発電所1号機から半径2km圏内の住民に避難指示。21時23分、国は福島第一原子力発電所1号機から半径3km圏内の住民に避難指示を、半径3km～10km圏内の住民に屋内退避指示を出しました。町は屋内退避の10km圏内に位置し、東京電力と原子力発電所のトラブルに備えて通報協定を結んでいましたが、避難指示の情報が伝えられることはありませんでした。



2011（平成23）年

【3月11日】

17:40 浪江町 震度5弱の地震

18:05 自衛隊に派遣要請

19:00 災害対策本部会議（津波避難確認、各避難所からの報告について協議）、津波による屋根の上の避難者の救助要請（消防署、警察署、消防団）

21:23 内閣総理大臣より、県知事、大熊町長および双葉町長に対し、福島第一原子力発電所1号機から半径3km圏内の住民に避難指示、半径3km～10km圏内の住民に屋内退避指示。浪江町は退避指示未確認（報道により事実確認）

23:05 災害対策本部会議（避難者の支援、捜索活動等について協議）



自衛隊などの救出活動の様子